

肥育牛の枝肉成績の年次間推移

玉城政信 金城寛信 島袋宏俊 石川和位

I 要 約

沖縄県内で生産された黒毛和種去勢牛で、1988年から1995年の間に屠畜し格付された5082頭の枝肉成績の年次間の推移を検討した。その結果は次のとおりである。

1. 枝肉重量は1988年～1990年396kgであるが、1991年に407kgと最大値を示し、その後微減し、1993年には399kgとなり、1994年より上昇に転じて1995年は405kgになった。推定DGは1993年に0.69kgと低いが、おおむね枝肉重量と同じ結果を得た。
2. BMSNo.は1988年～1990年4.36であるが、1992年には4.80と最大値を示し、1993年以降は4.40から徐々に低下してきた。経営得点指数は1991年に809点と高く、その後徐々に低下したが、1995年には774点となった。
3. 1992年までの経営得点指数の向上は、BMSNo.が向上したのに支えられ、1993年に経営得点指数が低下したのは、BMSNo.と推定DGが低下したためと考えられる。

II 緒 言

肉用牛経営においては、国産牛肉と輸入牛肉および国内の産地間競争が一層激化する状況にあります。このような状況で肉用牛の生産地形成と改良の推進を図るためには、過去の肥育牛成績から肉用牛の能力と飼養管理技術の成果を判断し、これからの改良に寄与する必要がある。その中で沖縄県内で生産された黒毛和種去勢肥育牛枝肉の年ごとの推移に関する報告は少ない。

このようなことから牛枝肉格付が改正になった1988年から1995年の8年間の県内における黒毛和種去勢肥育牛の枝肉成績の推移について報告する。

III 材料及び方法

1. 供試材料

沖縄県内で生産され、1988年から1995年の間に屠畜、格付された黒毛和種去勢牛5082頭の枝肉成績を用いた。

2. 調査項目

1) 枝肉重量および推定DG

温屠体重量を枝肉重量とし、推定DGは、既報¹⁾と同じく以下の式に従って求めた。

$$(\text{枝肉重量} \div \text{枝肉歩留} - \text{生時体重}) \div \text{生後日齢}$$

2) 格付、BMSNo.およびロース芯面積

格付、BMSNo.およびロース芯面積については、日本食肉格付協会の格付員の評価とした。

3) 肉質評点および経営得点指数

肉質評点は既報と同じく格付けおよびBMSNo.ごとに36通りとし、1日当りの収益性を求めるために以下の式によって経営得点指数を求めた。

$$\text{枝肉重量} \times \text{肉質評点} \div \text{生後日齢}$$

IV 結果及び考察

1. 材料牛頭数とその占める割合が多い種雄牛

年次ごとの材料牛頭数とその占める割合が多い種雄牛を表-1に示した。1988年から1992年までの年次ごとの平均材料牛頭数は405頭であるが、1993年および1994年は1200頭を上回った。その中で枝肉共励会や共進会に出品さ

れた材料牛は年平均150頭程度である。

材料牛に占める割合の多い種雄牛は1988年～1990年、1992年および1993年では糸富士が25.7%から15.0%の範囲であった。1995年は藤波15.7%、晴姫13.5%、谷吉土井11.0%の順である。

表-1 材料牛頭数とその占める割合が多い種雄牛

年次	1988 (昭和63) ～1990 (平2)	1991 (平3)	1992 (平4)	1993 (平5)	1994 (平6)	1995 (平7)
供試頭数	1149	377	497	1207	1342	510
内共励会出品割合 (%)	20.6	32.1	29.2	12.3	18.6	19.6
種雄牛名 (頭)	糸 富 士 (295)	富 士 晴 (93)	糸 富 士 (106)	糸 富 士 (181)	谷 吉 土 井 (173)	藤 波 (80)
割 合 (%)	25.7	24.7	21.3	15.0	12.9	15.7
種雄牛名 (頭)	安 波 土 井 (156)	糸 富 士 (60)	福 美 (52)	福 美 (129)	晴 茂 (133)	晴 姫 (69)
割 合 (%)	13.6	15.9	10.5	10.7	9.9	13.5
種雄牛名 (頭)	糸 松 (66)	福 美 (42)	富 士 晴 (43)	福 谷 (122)	藤 波 (82)	谷 吉 土 井 (56)
割 合 (%)	5.7	11.1	8.7	10.1	6.1	11.0

2. 枝肉成績の推移

沖縄県で生産された黒毛和種去勢牛の枝肉成績推移を表-2に示した。

表-2 沖縄県で生産された黒毛和種去勢牛の年次ごとの枝肉成績の推移

年次	1988 (昭和63) ～1990 (平2)	1991 (平3)	1992 (平4)	1993 (平5)	1994 (平6)	1995 (平7)
頭 数	1149	377	497	1207	1342	510
枝 肉 重 量 (kg)	396±45	407±46	405±48	399±42	403±44	405±46
推 定 D G (kg)	0.73±0.11	0.73±0.10	0.72±0.10	0.69±0.09	0.71±0.09	0.73±0.10
肉 質 評 点	1640±361	1711±356	1699±422	1626±372	1641±362	1638±344
格付4以上 (%)	31.2	37.9	41.2	30.4	32.7	33.1
BMSNo.	4.36±1.92	4.64±2.05	4.80±2.23	4.40±1.86	4.38±1.79	4.37±1.77
経営得点指数	780±208	809±192	798±218	734±191	761±200	774±188
出 荷 月 齢	27.7±3.3	28.4±2.8	28.5±2.7	29.2±2.3	28.7±2.2	28.3±2.2

1) 枝肉重量および推定DG

枝肉重量および推定DGの年次ごとの推移を図-1に示した。枝肉重量は1988年～1990年に396kgであるが、1991年に407kgと調査期間中の最大値を示し、その後微減し1993年には399kgとなり、1994年から上昇に転じ1995年には405kgになった。推定DGは1995年は0.73kgであるが、おおむね枝肉重量と同じ結果を得た。

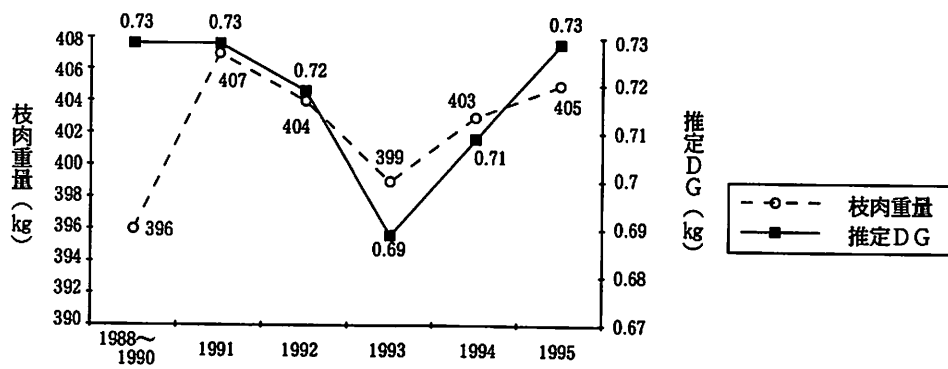


図-1 枝肉重量および推定DGの年次ごとの推移

2) 肉質評点および格付

肉質評点および格付4以上の割合の年次ごとの推移は表-2に示すとおりで、肉質評点は1988年～1990年は1640点であるが1991年には1711点と最大値となった。その後1993年は1626点と最低となり、1995年は1638点である。

格付4以上の割合は1992年の41.2%を最大に1993年に最低となり、その後微増し1995年には33.1%になった。

3) BMSNo.および経営得点指数

BMSNo.および経営得点指数を図-2に示した。BMSNo.は1988年～1990年に4.36であるが、1992年に4.80と調査期間中の最大値を示し、1993年以降は4.40から徐々に低くなってきた。経営得点指数は1991年に809点と高く、その後徐々に低下し、1995年には774点となった。

1992年までの経営得点指数の向上は、BMSNo.が向上したのに支えられたものと考えられた。1993年に経営得点指数が734点に低下したのは、推定DGが0.69kgと1992年より0.03kg低くなり、BMSNo.も4.40と1992年より0.40ポイント低下したためと考えられた。1994年以降の経営得点指数の向上は推定DGの向上によるものと考えられる。また、枝肉共励会や共進会に出品される肥育牛はある程度選抜されたものと考えられるが、今回の材料牛に占める共励会などの出品割合は1991年32.1%、1992年29.2%と高く、このために1991年および1992年の経営得点指数が高くなったと考えられた。

推定DGについては向上の傾向にあるがBMSNo.は横ばいの状況にあることから、今後はBMSNo.の向上について検討が必要と考えられた。

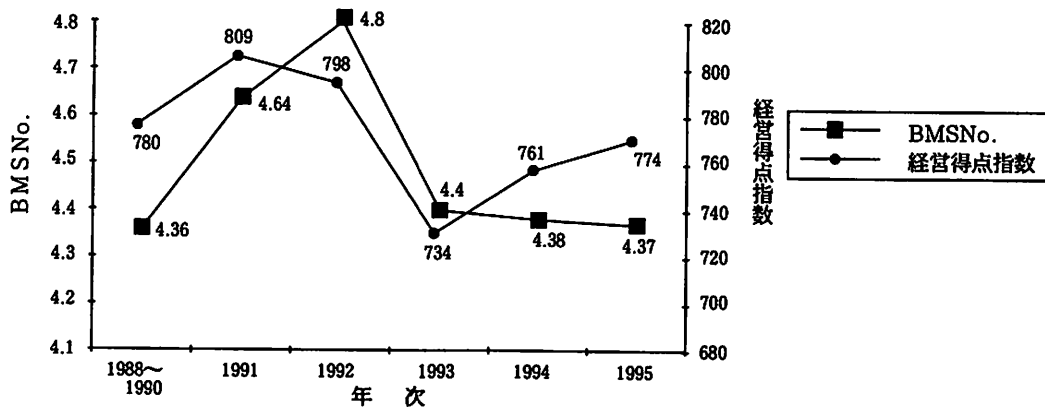


図-2 BMSNo.および経営得点指数の年次ごとの推移

V 引用文献

1) 玉城政信・金城寛信・島袋宏俊・石川和位、1995、種雄牛の現場評価(5)種雄牛の枝肉評価と経済性の高い子牛生産に適した種雄牛選定：1995年度、沖縄畜試研報、33、41～50